

音楽科教育における他分野教育との連携への考察：音楽と物語

— 展覧企画『木を植える人』から体感型読書『スイミー』へ —

A Study of Cooperation with the Music Education and Other Field : Music and Story-Telling

— from The Exhibition Project “The Man Who Planted Trees” to The Sensory Reading
“Swimmy” —

次世代教育学部学級経営学科

山本 美紀

YAMAMOTO, Miki

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：音楽科教育，芸術教育，他分野連携，コミュニティ，個人と共同体，体験

Abstract : This article is a progress report for the study concerning the construction of “The Sensory Reading Program” . Also, it is for the purpose of explaining the connection between “The Exhibition Project” (2003-2006) and our study, “The Sensory Reading Program.”

“The Exhibition Project” (2003-2006) was an artistic activity seeking to build relationship of the manner of art with human being. I have worked with some artists and players for the project. “The Exhibition Project” is characterized by music and modern arts telling the story. No hero appears on the stage. Objects alone are placed around the set hinted at scenes and images of people in the story.

On the other hand, “The Sensory Reading Program” is the reading activity constructed of story-telling with music and the other arts. Accordingly, the audience can read more independently and come into the dialog with the story-teller.

Through these considerations, I would like to show a way of cooperation with music education and other fields in education. Also I will state its possibilities and next tasks of “The Sensory Reading” .

Keywords : education, music, art, community, self-experience, cooperation

I. はじめに：「体感型読書」の試み

本稿は、現在継続中の「体感型読書」プログラムの構築¹に関わる、本年度の研究についての実践報告を目的とするが、同時に、「体感型読書」構想に至る、これまでの筆者の研究実践「展覧企画」プロジェクトとの関連性を明確にしようとするものである。それらの考察を通し、本稿では特に、音楽科教育と他分野教育との連携とその可能性について述べ、今後の本研究における課題と展望について示したい。

体感型読書：その目的とするところ

「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本研究はそのような読書活動を可能とする、絵本の「体感型読書」プログラムの構築により、子どもたちに絵本を深く体験させる絵本鑑賞方法のシステム研究と開発を目指すものである。

一般の人々による「本を読む」という行為自体は、

人間の営みとしては比較的新しいものであり、特に幼児・児童期におけるそれは、近代以降のものである。公共性の議論において、ハーバーマスは「公共圏」というものは17世紀から18世紀にかけてイギリスの産業革命期に始まったものであり、その契機となったのが、新聞や「読書サークル」であったと指摘する。このことは、当時もそれまでも、読書は決して「個人的」なものではなく、むしろ共同体をつなぐ媒体としてあったということを示唆している。なぜなら、人間の文化史においては読書ではなく「語り部」と呼ばれる専門家の話を、共同体がみなで聴くということが通常行われていたものであるからだ。語り部は「物語る」ことによって共同体の歴史を規定し、それを通して人々が共同体内の道徳や規範意識を共有する営みが続いてきた。

現代の私たち大人にとって、「読書」は非常に個人的な行為である。しかし、その下地が作られる幼児期・児童期の「読書」体験は、多様な読み手（父母、小学校・園・図書館・育児サークルに携わる教職員やボランティア等）によって提供される。実際、子どもたちを対象にした絵本の読み聞かせにおいて、絵本以外の要素を組み込んだ活動は、様々な場所で展開されてきた。本研究では読み聞かせにおいて、そのような聞き手が複数となる場合の物語を通しての「集合的共有」に着眼している。普通1対1の読み聞かせの場合は、読み手と聞き手との相互コミュニケーションによって成立し、そこに総合的な因子や力学等が連続的断片的に作用する。聞き手は、そこで「物語」を通して他者の考え方や感じ方の一端にふれることを体験するのである。しかし、聞き手が複数人数の場合は、さらにそこに聞き手どうしのコミュニケーションが本来ならば存在するはずである。

しかし今日の一般的な読み聞かせの場において、それが実現することは非常に難しく、何らかの働きかけを必要とする。そのような聞き手どうしのコミュニケーションのきっかけを生み出すために、本研究では「体感型読書」によって「聴く」「読む」行為を様々な方向から深化させ、「物語」体験を個人の体験から共同体の体験へとつなぐプロセスを整えることを最終目標としている。

実際、個別な体験が、共同体に共有されるためには、音声言語以外にも様々な手段が考えられる。例えば「音楽」はその1つである。他にも、音楽を受けての囃子や踊りといった身体表現への発露は、一気に共同体をつなぐものであり、日本古来の伝統芸能にも確認で

きるものである。さらに、コンピューター等を駆使した映像等の効果と、読み聞かせによる有機的コミュニケーションとの融合は、共同体の体験を強化させ得る。

本研究による手法は、多様な側面から人間の五感に働きかけるものであり、参加者を「受け手」の位置にとどまったままで終わらせない。物語は聞き手の内的世界に取り込まれ、各々において「再創造」される。「再創造」された新たな物語（解釈）は、物語受容の体験を共にした人々と共有することによって自覚化されるのである。

筆者がこのような考えに至った背景には、博士過程で取り上げた音楽祭研究を通じた芸術と地域社会との関係性構築への疑問があった。

Ⅱ. 「展覧企画」の着想と実践

1. 音楽祭研究

2002年9月に上梓した博士論文「聖化する音楽祭—グロカリゼーションとしての祝祭研究」では、音楽祭運営機関の協力を得て、様々な音楽祭とその実態を調査することができた。その際、ほとんどボランティアによって成り立っているある音楽祭で、中心的な役割を果たしていたボランティアから、「音楽祭なんて、不要なダム建設と同じだ」という言葉を聞いたのである。「『国際音楽祭』という名は付いているものの、それほど国際交流の効果があるわけではない。地元の人たちも来てくれないし、自分たちは、急速にドーナツ化が進んでいくこの街に何とか昔の活気を取り戻したいだけで、その効果が実感できないまま、どんどん全く見ず知らずの外国人アーティストに莫大な金がかかっていく。いったい、音楽祭によって自分たちが得る恩恵は、無理してでもやるメリットってなんだ？」というのだ。言い換えるならば、「自分たちに関連性や必然性を見出せない音楽祭が、果たして必要なのか？」という問いである。そしてこのような問いは、日本に限らず、世界中で真剣に音楽祭を運営している人たちが開催地域の人たちの、共通の問題意識なのである。

もちろん、この問題意識は音楽祭の特性と密接に関連している。音楽祭の特性とは、ある開催地で、一定期間、集中して様々な演奏会を始めとした芸術文化企画が行なわれることである。このことは、音楽祭の主要要素として、「開催地」を切り離して考えられないということを示している。実際に音楽祭を見ると、その音楽祭に開催地の文化的・伝統的背景が反映されて

いない場合、その多くが土地との必然性を失い、消えていっている。つまり、開催地の歴史（共同体の共有する物語）や、個人的体験などが音楽祭に反映されない場合、結局それは地域で浮いた存在になってしまい、「無くても別にいい」ということになっていくのである。

このことは、芸術活動そのものが、一人の人間にとって必要となる要素と共通するものでもある。音楽を始めとした芸術作品は、多くの人々が共感する「物語」と、個別の「体験」がなければ、一人の人間にとって価値あるものとならない。なぜなら、人が芸術作品に触れる時、この2つによって理解し、味わうことが可能となるからである。

芸術が人々に必要とされるために最も困難であるのは、多くの人々が共感を持って受け入れている「物語」と、鑑賞者各人の既存の知識や経験をベースとした固有の「体験」を、いかにして作品に結び付け、位置づけるかということだ。

この「物語」と「体験」を芸術作品と結びつける試みとして、一連の「展覧企画」の着想を得たのである。

2. 音楽と美術と物語

「展覧企画」とはexhibitionの訳語であると同時に、芸術作品の展覧会の要素に物語と演奏会の要素を組み合わせることによって、展覧会にストーリー性と時間の流れを組み入れるという、独自の表現の基本形式を示すものである。さらに、展覧企画による作品の特徴は、一つ一つのエキシビションの物語の主人公が、最後までその姿を現さないことである。音楽や美術を中心としながら、香り・味・肌触り・といった様々な要素が、物語の進行によって様々に移り変わり、観る人の心の中に絵本のようにその物語を描き出していく。様々なものが物語の流れの中で混じり合い、観る人の心を背景に一つの世界を作り出し、そこに息づく独自の主人公を浮かび上がらせる。つまり、様々な要素は、そのような世界・主人公を描き出す舞台装置なのである。

このような、物語を軸に音楽と美術を媒介として、観客と制作者の双方向にイメージが交差し、ひとつの表現となっていく様式は、従来にないものであり、独特の手法であると言えよう。ページをめくっていた最後に現れる主人公は、観る人一人ひとりの心を背景に現れる主人公であり、物語の最初からその人の心にいた主人公である。つまり、「展覧企画」のエキシビションは、観る人の存在がなければ、成立しない。

鑑賞者と芸術作品を作りだす者との境界を越える鍵は、ここにあるのではないだろうか。なぜなら、このような提示の仕方により、作品は、従来の価値判断や、固有の枠組みから離れて、鑑賞者の下で1つの作品として自由に感じられるのが容易になるからだ。さらに鑑賞者が自分の中の主人公に気が付き、さらに互いにその存在を語り始めたならば、案外隣の人との違いよりも、同じ思いを持つことに気付かされるかもしれない。そのようなプロセスを通し、芸術は人と人との間で息づき始め、コミュニケーションのきっかけとなる可能性が生まれる。

そのような思索の成果として、2003年から2006年まで、「展覧企画」として『パテシエの工房』『木を植える人』『緑の風』『街まき』『歎異抄』などの作品を制作し、実践公演を様々な会場で行った。以下に、今回の「体感型読書」に直接つながる、絵本を題材とした2作品について以下に記す。

①展覧企画『木を植える人』

物語：絵本ジャン・ジオノ『木を植える人』

美術作品：荒島智子

音楽：チャイコフスキー《四季Op.37b》より

ピアノ演奏：小石かつら 他

ただひたすら「木を植える」人エルゼアール・ブフィエは、愛する家族を失い、仕事も失うという、深い絶望を経験した人物である。どんなに積み上げても、すべてを一瞬にして奪われることを経験した彼は、「木を植える」ことを始める。

種を選び、植えていく。ただそれだけのことを、彼は毎日ただ一人で、誠実にやり続ける。彼は周りの環境の変化（状況）に動じることもなければ、誰かに大声で「一緒にやろう！」と叫ぶこともない。未だ見ぬ、「未来に生い茂る木々」をはっきりと見つめ、何よりも今を見つめ、淡々と「木を植え」続けるのである。

物語の語り手である「わたし」は、旅の途中に行き倒れ同然で、ブフィエに出会う。以来、彼はブフィエとともにある平安に魅せられ、定期的に訪れるようになる。物語は、そのような「わたし」の目を通し、彼自身の人生とブフィエの人生、そしてそれを取りまく人々のエピソードが平行し、時に交差しつつ語られていくものである。

舞台は、人体をモチーフにした現代アートと、チャイコフスキー作曲《四季Four Seasons》のピアノ演奏、そして原作の字幕投影、の3つで構成される。い

ずれも、鑑賞者の心の中に「ブフィエ」を作り上げるための「舞台装置」である。現代アートの作品は、物語の進行につれ、上下に移動され、字幕は物語の進行、登場人物の動きを主に表現し、音楽は、舞台の時間の流れ、季節の流れ、登場人物の心の情景などを、風景のように描写していくというものである。

この公演では、アンケートを取ることができた。ここにそのいくつかを挙げてみよう。

アンケート回答例1 舞台は抵抗感なく、自分自身の中に入ってきた感じがした。とても癒された。涙がでてきそうな場面もあった。

アンケート回答例2 荒れ果てた広野が私の心の中と重なった。小さな集落で住むぎすぎすした気持ちを持った人々が自分のように思えた。そんな私の中に「木を植える人」が現れた。黙々と植え続けてきた木々のなかで、根をはって作品が立ち上がった時、なんだかちょっと嬉しかった。自分の荒んでいた心に少し緑が生えてきたように感じた。二部では、他の作品もいつの間にか立ち上がったような気がした。75歳になった主人公も場所を変えて木を植え続けている。私の心だけではなくて、他の人の心にも同じように木を植え続けているのかなって感じた。数十年後に緑が蘇った荒野、潤いを取り戻した集落に住む人々が自分の今の気持ちとオーバーラップした。

アンケート回答例3 「木を植える人」は私じゃなく、他の人だった。でも、主人公から学んだというか、私が忘れていたことを思い出させてくれたことがあるのも事実。

アンケート回答例4 人と人の間に存在するアートといった感じで、細胞と細胞が普段情報交換している内容といった感じ。特別な反応といったものではなく、大切なんだけど目立たない日常的コミュニケーションだった。そのなにげないコミュニケーションの連続が、特別な反応のやりとりをするベースになると考えられ面白かった。今の時代が求めている、忘れていたものなのではないか。多くの人が癒されたのは、目立たなくも大切な基本的コミュニケーションを提示できたからではないか？



写真1 展覧企画『木を植える人』

2003年4月20日 於：楽精舎 響流

②展覧企画『街まき』

物語：『街まき』

美術作品：城戸みゆき

音楽：打楽器のための小品より

マリンバほか打楽器演奏：山本光知子

*ワークショップ『おあそびまいり』

工作：小さな家をつくるキット

ボディーパーカッション指導：坂上康子（宝塚市小学校教諭：当時）

どちらかと言えば、それまで大人向けの「展覧企画」であったが、本作品は子どもと家族を対象としたものとなった。ここで、ほぼ現在の「体感型読書」の原型ができたといってよいだろう。

物語には、2人の子どもと謎のおじさんが登場する。このどれもが主人公とはいえず、登場場面では、微妙な濃淡のある存在感を放つ。

ある日、子どもたちのすむ街に、謎のおじさんがやってきて、地図を作り始めた。子どもたちは、おじさんの地図作りを手伝う。地図が完成すると、おじさんは地図を巻きとり、どこかに行ってしまった。困ったのは子どもたちである。なぜなら、巻き取られてしまったのは、街そのものだったからだ。子どもたちはおじさんを探す旅に出、やがておじさんを見つける。おじさんは、街を返す代わりに、子どもたちに種を与えた。子どもたちは、街のあった場所に帰り、種を植え育てる。芽が出るとそれは家となって街は元通りになり、子どもたちは家に帰り、再び家族と食卓を囲む、という物語である。



写真2 展覧企画『街まき』

2003年12月17日 於：楽精舎 響流

絵本は、美術作家城戸みゆきによる作品であり、全体がブルーブラック1色で描かれ、影絵のような雰囲気も醸し出す。「おじさん」も、「サングラス」に「ひげ」と怪しげで、一見子どもたちには受け入れ難く思える登場人物である。しかし、単一の色調に、物語が加わることで、かえって自由な色を心の中で合わせていくことができる。また、絵には最小限の動きが加えられ、同時にマリンバや、効果音的に用いられる音楽が絵本の各場面への説明を加える役目を果たしており、子どもたちにとっては新しいアニメのように受け止められたようである。

さらに本作品の特徴は、「展覧企画」として行われる公演と共に、子どもたち向けのワークショップが行われたことである。ここで子どもたちは、作品の中にある絵を、想像して紙で家を作り、公演の休憩時間中に舞台に設置し、アニメーションと一緒に楽しんだり、効果音の部分で、事前に練習したボディーパーカッションで参加したりしたのである。

一連のプロセスを通じて、子どもたちは絵本の内容を実際に体験し理解する。さらにその内容を手掛かりに、たとえそれが難解な現代音楽であっても、自分なりに納得して受け入れることができるのである。



写真3 ワークショップ「おあそびまいる」1上

写真4 ワークショップ「おあそびまいる」2下

Ⅲ. 体感型読書『スイミー』による授業実践

このような一連の「展覧企画」の実践を通して筆者が確信したのは、音楽が、その人の心の中に根付き、親しむ存在となるためには、「物語」と「体験」がまず必要であることであった。「木を植える人」でのアンケート結果は、そのことを如実に示していると言える。

人が芸術を身近なものとして生涯に渡って親しむ下地は、子ども時代からの「慣れ」である。学校教育の中で、芸術教育を行う意義はそこにある。学校では、同世代の友人たちと共に音楽に出会い、音楽によって感じた思いや心象を互いに共有すること、つまり「共感する」ことができる。互いに思いや心象を語ることで、同じものに接しながらも、他者の心の動きと自分のそれとが必ずしも同じでないことを知るだけでなく、うまく表現する方法や言葉を持ち合わせていなかった子どもは、それらを獲得していく機会となるであろう。そのような、音楽科教育において音楽と他の要素を連携させる方法論の考察と、その成果検証のために、筆者が現在行っている、絵本『スイミー』の授業実践を紹介したい。

レオ・レオニ『スイミー ―ちいさなかしこいさかなのはなし』は、小学校2年生の国語科の教科書にも

表1 絵本『スイミー』と他の連携要素

実施学校 (日付)	対象学年	クラス数	②音楽	③ボディー・ パーカッション	④言語活動
三田市立富士小学校 (H22年6月23日)	第2学年	3組	既存作品	創作と即興	○
笹山市立味間小学校 (H22年9月24日)	第2学年	2組	創作作品	創作	○
大学内教育イベント (H22年11月4日)	幼児－児童	2組	創作作品＋既存作品	創作	×

採用されている物語である。水の中を表現する青と白を基調としたやわらかな色彩と、鮮やかな赤の魚の兄弟たち、そして真っ黒なスイミーと、色のコントラストがはっきり出ている半面、版画によって描かれているのが特徴的で、低学年でも印象によく残る図柄となっている。

小さな赤い魚の兄弟たちと、一緒にいた1匹だけ色の違う主人公のスイミーが、兄弟との別離を経て、広い海の中で様々な自分とは違う種類の生き物と出会うことによって成長し、新しく出会った仲間たちと協力して目的を達成するストーリーである。小学生低学年の児童たちにとって、家庭を離れて学校で新しい友達と出会い、様々な出来事を体験しながら関係性をつくっていく自分とスイミーの物語は、重なる部分も多いものであろう。

授業は、①物語（『スイミー』で固定）、②音楽、③ボディー・パーカッション、④言語活動の4つの要素によって構成される。現在まで、2つの小学校と、筆者が勤務する環太平洋大学における教育イベントで授業実践を行ってきた（表1参照）。

基本的な授業では、絵本をコンピューターに取り込み、パワーポイントで紙芝居のようにスクリーンに映しながら読み聞かせていく。物語の展開の中で、場面に応じた音楽を用い、大きな動きのある場面ではボディー・パーカッションでリズムを体験する。同様に、物語の中で登場人物の心が大きく動いている場面において、魚の形に切った紙片にそれぞれの魚の気持ちになって考えたことを表現する言語活動を行うというもののである。

次に具体的な授業の進め方であるが、最初の実践校の三田市立富士小学校では、音楽としてラヴェル作曲《亡き王女のためのパヴァーヌ》と《ボレロ》を用い



写真5 体感型読書「スイミー」授業風景1
2010年9月24日 於：笹山市立味間小学校

た。2曲ともに2拍子系の舞曲であるが、《パヴァーヌ》は終始静かで穏やかな作品、《ボレロ》は徐々に楽器が加わることで内包された強さや激しさが増していくという、低学年の子どもたちにとってリズムや、曲想の特徴がつかみやすい音楽を用いた。また、ボディー・パーカッションは、筆者が創作を行った。

実践2校目の篠山市立味間小学校では、作曲家である山口聖代氏に、絵本の物語に沿った作品を委嘱した。その際、絵本に「絵」として描かれていない要素を、音楽で表現することを特に依頼した。例えば、スイミーが独りぼっちになった時の心理描写や、様々な生き物と出会う部分での生き物の様子を音楽で表現するというものである。言葉から連想される音楽は、その音楽が子どもたちにとって新しいものであれば、言葉と結びつき、音楽における表現というものの1つのモデルを提供することになる。山口氏が『スイミー』に付けた音楽は、現代音楽の手法を用いたものであるが、ながいうなぎの部分で（pp.17-18）のチューブを伸び縮みさせたような音で作った音楽や、「ドロップみたいな いわから はえてる、こんぶや わかめのはやし…」（pp.15-16）の、きらきらした音色を用いた音楽など、子どもたちにとっては絵本の内容を伴って、十分納得できるものであったようである。さらに、山口氏はボディー・パーカッションによる作曲の経験²もあることから、該当部分（pp.25-30）のボディー・パーカッションもあわせて依頼した。ボディー・パーカッションを用いるのは、自分たちを脅かす黒い大きなさかなを、みんなで追い出そうとする戦闘準備の場面である。



写真6 体感型読書「スイミー」授業風景2（上）

写真7 児童の言語活動例（下）

2010年9月24日 於：笹山市立味間小学校

この部分をずっと読んでしまうのではなく、ドキドキする気持ちや、みんなで何かを一緒にやる、という気持ちをボディー・パークションで表現することで、絵本の中に入って体験してみよう、というのが目的の1つである。さらに、日ごろは体験することのない「自分の体」が表現する「音」というものの存在に気付かせる目的がある。「自分の体」の可能性を知ることが、「自分への気づき」とつながるような、授業展開が今後考えられる部分でもある。結果的に、1人の作曲家に依頼したことで、音楽とボディー・パークションの部分で自然につながり、子どもたちが違和感を覚えることなく物語に入っていくのを助ける音楽作品となった。

言語活動は、ボディー・パークションと同様に、スイミーの呼び掛けに応じて大きなさかなを追い出す練習を行う部分で、スイミーが新しく出会った仲間の「さかな」になった気持ちで表わしてみようというものである。小さな赤いさかなたちに模した紙片に、それぞれの言葉が書き込まれたが、「ぼく、がんばるよ」という言葉以外に、「ありがとう、スイミー」との言葉が多かったのが印象的であった。



写真8 体感型読書「スイミー」授業風景1
2010年9月24日 於：笹山市立味間小学校

Ⅳ. まとめ 一本研究の展望と課題

音楽を始めとした芸術を、人が身近なものとして生涯に渡って親しむ下地には、子ども時代からの「慣れ」が必要であることは先に述べた。この「慣れ」こそ、体験である。「芸術を感じる心というのは教えられるものではない。自由に感じる必要がある」という説を唱える識者もいる。しかし、芸術作品や活動を観たり聴いたり触れたりすることで、そこから自分に関わる、何らかのメッセージを読み取ることができるとい

うのは、実はそれほど「自然な」ことではない。自分と対峙する作品が、自分にとって「固有の」意義を持ち、何らかの事柄を働きかけてくるといった事柄を「自由に」感じるには、相当の訓練が必要である。

幼いころから絵本を読み聞かせてもらっていたり、本を読んでいたという習慣を持つ者が、本から様々なメッセージを得たり、時に適った助けや指針を得たりするのと同じように、子どもたちから音楽を聴いたり、習ったりしていた者は、音楽が語りかける内容を自分なりに理解できるものである。両者はともに、こんな風に読む（弾く）、聴くということが、環境の自然な支援によって実現されてきたのだ。

「音楽は言葉を超えたものだ」と言う人がいるが、残念ながら音楽が言葉を超えることはない。むしろ音楽はもう一つの「言語」そのものであるととらえるべきであろう。あるイメージを、言葉で表現するか、音楽で表現するかの違いであり、音楽で表現できるものは、言葉でも表現できる。音楽も言葉も、共に外に向かって表現するための道具であるが、それは同時に内なる世界を理解するためのものである。その理解に必要なのが、単語や文法（テキスト）、そして背景理解（コンテキスト）であることも同じである。音楽では前者が音符や記号や形式であり、後者は歴史であったり作品ができたいきさつであったりする。

第Ⅱ節でふれたように、本研究は「音楽はいかにして人に寄り添うものとなるか」という筆者の問題意識を出発点とするが、この度、子どもの言語活動やその教育を専門領域とする本研究代表者伊崎一夫によって、「音楽」と「物語」という結びつきが先鋭化し、学校教育におけるさらなる可能性を見せるものとなった。なぜなら、「物語」という視点から「音楽」をとらえることによって、「音楽」が「言語」を伴うことによる、個人的体験を他者と共有するための手段の多様性が確認できるようになったからである。

個別の体験は「共同体」において共有される体験をくぐることによってこそ、調整され深化するものである。そこで物語は音楽を伴って「再創造」され、聞き手に位置付き、共有化される。このプロセスは、まさに豊かな言語活動の基礎を培うものであり、その本質はものごとを分析、総合、比較、関係づけるなどの論理的思考、吟味的思考、批判的思考につながる。そこでの体験を通して培われた論理的思考力を駆使し、応用しつつ人間は生きていく。その「応用力」は、幼い頃からの音楽を始めとした芸術活動そのものにかかわ

る体験の中で培われ鍛えられるものであり、その豊かさに比例する。

研究は始まったばかりであり、明確な方法論や研究目的である「体感型読書プログラム」構築に至るまでには、まだまだ解明しなければならない点も多い。しかし、音楽科教育の立場から考えると、新学習指導要領の内容を実現していくためにも、今後はますます、学校の行事や、生活、道徳の時間など、他分野との具体的な連携方法が問題になってくるのは明らかである。そのような中で、音楽科授業の学びの一つひとつがただ「知る」だけで終わることなく、実際に音楽が自分のものとして子どもの心の中に場を得ていくためには、音楽を挟んで互いに向き合い会話し、思いを共有・共感しあう体験が欠かせない。先に見た「展覧企画」でのアンケートも、そのことを示していると言えよう。アンケートでは、芸術によって、観客の中にすでにあるものが作品に反映・喚起され、それが観客に返された時に、深い感動が訪れることが確認できる。それが共有されたとき、人は自分が独りではない、ということを確認し、他者と共通する普遍的な思いの存在を気づかされることになり、他者と共にいる、という確信で満たされているのである。芸術が人間にとって必要とされている理由の一つがここにある。

最後に、今後音楽と他分野を連携させることによって生まれる、具体的な期待について述べる。その一つは、現時点において音楽科教育でさらに充実が必要と考えられる「悲嘆の表現」を扱えるようになる可能性である。

現代日本においては、墓地が郊外に作られたり、火葬場が市街地から遠ざけられたりなど、「死」が日常生活から遠ざけられる傾向がある。核家族化も手伝って、子どもたちからは「死」が表面上隠されたものとなった。「芸術」が古来「作法」を示したことからわかるように、芸術において「喜びの作法」（結婚式など）「悲しみの作法」（葬儀など）は欠かせぬ要素である。

現代の日本の音楽教育においては、喜びや希望に満ちた表現が含まれるものは多いが、「死」や「悲嘆」などを含み、その表出のモデルを示す題材は少ない。「物語」を「音楽」に連携させることで、あるいは、音楽そのものの持つ物語性を表面に押し出すことで、それらの限界を超える可能性が見えてくる。

本年度の研究においては、独りであるということ、出会うことによる成長、共にあること、といったテーマをスイミーで追求してきたが、次年度以降は、その

ような「死」や「悲嘆」といったものに向き合うテーマを据え、「体感型読書」を基盤とした音楽科教育と他分野との具体的な連携及び、内容的な深まりについてさらに探っていきたい。

<参考文献表>

レオニ，レオ．1969年『スイミー ―ちいさなかしこいさかのはなし』谷川俊太郎訳，好学社

文部科学省，2009年8月『小学校学習指導要領 第4版』

文部科学省，2008年8月『小学校学習指導要領解説』

<註>

¹学術振興財団22年度科学研究補助金対象研究 基盤研究C「地域・教育・文化における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」（研究代表者：伊崎一夫）

²山口聖代<Drop of Water> 2009年

（平成22年11月19日受理）